

昔ながらの湯治場のたたずまいを今に残す大蔵村肘折温泉。雪深い集落に軒を連ねる老舗旅館や土産店前の路地を歩けば、どこか懐かしさが漂う。そんな肘折で「ワーケーション」の受け入れ事業が始まっている。温泉地の変わらない魅力と、利用客のライフスタイルの変化に応える新たな湯治場モデルを目指している。

ワーケーションとは「ワーク（働く）」と「バケーション（休暇）」を組み合わせた造語。情報通信技術（ICT）を活用し、旅先で仕事ができる多様な働き方の一つとして注目を集める。

日帰り温泉施設「肘折いでゆ館」2階の一角に高速Wi-Fi、大型モニターなどを設置したコワーキングスペースが今年1月、お目見えした。利用者は持参したパソコンを使ってインターネットに接続し、ウェブ会議に臨むことが可能になった。利用料は1時間600円に設定した。

旅館の中にも通信をより安定させるため、有線LANを完備した独自の部屋を用意す

大蔵・肘折版ワーケーション

肘折いでゆ館の2階に設けたコワーキングスペース。大型モニターなどを使い、ウェブ会議が可能になった
＝大蔵村肘折温泉



ホームページを開設したほか、発信力のある旅行会社や出版社の担当者を招いたツアーを2月に開催。参加者8人が豪雪地ならではのかんじきウォーキングやワサビの収穫などを体験し、魅力の一端に触れた。ツアー後の感想では「なかなかできない体験」「ワーケーションは国の動きを見てもトレンドになる」といった意見のほか、「まだまだ大蔵村の認知度を上げていく必要がある」との声も寄せられた。

新型コロナウイルスの影響を受ける全国各地の温泉地やリゾート地がウィズコロナ、

新たな湯治場モデル

コロナ禍 文化残しICT活用

る動きも。若松屋村井六助の専務村井美一さん(51)は「肘折でリモートワークがしたい」というお客さんの声がかきつけ」と話す。どの程度の設備が必要かを利用客の反応を聞きながら準備を進めたとい

いい、「完成形ではなく、ま

だスペースをつくってみたらいうレベルとしながらも温泉街全体にリモートワークを受け入れる動きが広まり、肘折のPRにつながれば」と期待感を示す。

村は肘折版ワーケーション「肘折ハカンス」と名付けた

アフターコロナを見据えた観光戦略に乗りだしている。温泉客が長期滞在し、体も心も癒やす文化を残す肘折温泉。新たな取り組みが、情緒ある温泉街にどんな風を吹き込むか注目している。

(新庄支社・佐々木亨)

金曜
トピックス